

「希望と夢の国」— スプリングスティーンが目指す新しい世界

三 浦 久

1999年4月9日、スペインのバルセローナを皮切りに、ブルース・スプリングスティーンは、14年振りに、Eストリートバンドとのコンサートを再開した。その後、6月27日まで、ドイツ、イタリア、フランス、イギリスを含むヨーロッパの13か国で計36回のコンサートを開き、7月からはアメリカでのコンサートが開始された。最初の15回のコンサートは、彼のホーム・ステートであるニュージャージー州、イースト・ラザフォードのコンチネンタル・エアラインズ・アリーナで行われた。キャパシティ2万人のこのアリーナでの15回のコンサートのチケットは、発売後3時間で売りきれたと言われている。

イースト・ラザフォードでのセットリストは、常に一定ではないが、彼の11枚のスタジオ・テイクのアルバムから大部分選曲されている。但し、そのセットリストには、常に2曲の新曲が含まれていた。それは、彼の故郷フリーホルドの町で過ごした子供時代のことを歌った「イン・フリーホルド」と、アンコールの最後に歌われる「ランド・オブ・ホープ・アンド・ドリームズ」である。

「イン・フリーホルド」はスプリングスティーンの過去を、そして「ランド・オブ・ホープ・アンド・ドリームズ」は彼の未来を歌っている。これらの歌は、全体のセットリストのプロローグとエピローグの働きをしていると言うことができるかもしれない。

この小論は、これらの2曲の新曲と、スプリングスティーンの初期の2枚のアルバム (Greetings from Asbury Park, N.J.『アズベリー・パークからの挨拶』と The Wild, The Innocent & The E Street Shuffle『青春の叫び』)に収められているいくつかの作品を検討することによって、常に変化し

つづけているスプリングスティーン作品の根底にある一貫性を検証しようとする試みである。

1

「最初の2枚のアルバムにおいては、自らの無意識から噴出する衝動をとらえようと、マシンガンのように言葉を吐き出しているが、彼自身その衝動を明確にとらえることができないでいる」¹と以前書いたことがある。

1973年にリリースされた彼のデビュー・アルバム『アズベリー・パークからの挨拶』の一曲目は、

Madman drummers bummers and Indians in the summer
with a teenage diplomat
In the dumps with the mumps as the adolescent pumps
his way into his hat

ということばで始まる。

確かに、この曲のみならず、このアルバムには、翻訳不可能と思われる表現に満ちている。しかし、これらの作品を丁寧に読み直してみると、これらの作品はまさに思春期から大人になりつつある若者たちの混沌とした心象風景そのものであることが分かる。マシンガンから吐き出されるような意味不明なことばの連続は、その心象風景と見事にマッチしている。

スプリングスティーンは、1995年に彼の11枚目のアルバム『ゴースト・オブ・トム・ジョード』がリリースされた後、全米でソロ・アコースティック・ツアーを行った。そのツアーで、彼は第二の故郷であるニュージャージー州アズベリー・パークを訪問した時、地元の新聞「アズベリー・パーク・プレス」の記者ケリー・ジェイン・コッターのインタビューを受けた。彼はそのインタビューの中で次のように語っている。「今夜は、22歳の時に書いた歌も歌うし、40歳の結婚している男として書いた歌も歌う。すべてがびたりと収まる。ぼくの作品はいわ

ば続いているひとつの小説だからね」²

スプリングスティーン 작품을ひとつの小説であると考えたのは彼だけではない。ケヴィン・コインは「フリーホルドのフォークナー」という記事の中で、「ブルース・スプリングスティーンは物語を語るアーティストであり、過去30年に書かれた彼の作品を一例に並べれば、それは十分に一冊の小説になる。それは、戦後のアメリカの不安定な状況の中で、人並みの生活を維持するために闘った人々について書かれた叙事詩的小説である」³と述べている。

確かに彼の今までの全アルバムをひとつの連続小説であると考えれば、それぞれのアルバムが収まるべきところに収まるように思われる。

第1章『アズベリー・パークからの挨拶』から、現時点での最終章である『ゴースト・オブ・ドム・ジョード』まで、彼はまわりの景色と自らの内面の世界を、淡々と観察し、描いてきたのである。

また彼の一連の作品を一本の映画であると考えれば、彼は「カメラマン」として、まわりの景色に向けて、また内面の世界に向けて、カメラを回し続けてきたとすることができる。

そのように考える時、彼の作品が、同じところにとどまらず、常に変化していることが納得できる。彼は年と共に、時代の変化や内面の変化に敏感に反応し、それを作品にしてきたのだ。

彼がもし、彼を世界のスーパースターに押し上げた3枚目のアルバム『明日なき暴走』の世界に固執し、その世界のみを繰り返して歌いつづけてきたならば、彼の作品は、「小説」としては極めて魅力の乏しいものになっていただろう。

また彼の作品には、ひとつの立場にたってもうひとつの立場を糾弾する作品が極めて少ないが、それは、彼が観察者であり、「カメラマン」であると考えれば納得できる。

彼はカメラを回し、まわりの景色を写しているだけなのである。警察やマフィアやヘルズ・エンジェルズなども善悪の判断の対象ではない。彼らもまたひとつの風景であり、人生という「サーカス」にはなくてはならない存在なのであ

る。

2

スプリングスティーンは1998年のアルバム未収録曲を中心に集められた『トラックス』の発売後、NBCのインタビューに応じて、「ぼくは自分の直感に従い、重要であると思われることについて書いてきた。今もそうしようと努めている」と語っているが、『アズベリー・パークからの挨拶』においては、彼にとって何が重要であると思えたのだろうか。彼のカメラはいかなる情景、いかなる人物を映し出しているのだろうか。

最初の歌「ブラインディッド・バイ・ザ・ライト」には、「狂ったドラマー」「浮浪者」「ティーンエージャーの外交官を連れたインディアンたち」「思春期の男の子」「欲情した酔漢」「歓楽街のマスコット」「旅の説教師」「シリコン巨乳のシスター」「酔っ払った学生」等、さまざまな人物が登場する。

どちらかというと彼らは皆普通ではない。普通でないどころか、大いに変わっている。エクセントリックである。しかしスプリングスティーンは彼らを糾弾していない。賞賛もしていない。淡々と彼らのことを映しているだけである。その混沌とした世界は、現実のアズベリー・パークやアトランティック・シティの混沌さであると同時に、彼の心の中の風景でもある。

ただどちらかという、彼がこのエクセントリックな人たちにある種のシンパシーを感じていることは確かだ。彼らは「光に目がくらみ」、夜の中に勢いよく放り出され倒れてしまう。しかし彼は言う、「でも大丈夫、なんとか切りぬけるだろう」と。

いや、彼はむしろ「光に目がくらむこと」が重要であると考えている。与えられた価値観や、上からの指示に従順に従うのではなく、自ら一步を踏み出すこと、そして倒れること、そのことが重要であると考えている。そこからしか物語は始まらないのだ。彼の「小説」の第一章はまさに彼の若かった頃のまわ

りの情景と彼の内面の世界の混沌から始まっている。

母親から「太陽を見ちゃいけない」と言われながら、彼は、「面白いことは
そうしなければ得られないんだ」と言い返す。

He was blinded by the light
Cut loose like a deuce
Another runner in the night
Blinded by the light
Mama always told me not to look into the sights of the sun
Oh but mama that's where the fun is

彼は光に目がくらみ
勢いよく解き放たれる
彼もまた夜の疾走者
ママによく言われた、太陽をまとも見ちゃいけないって
でもママ、面白いことはそうしなければ得られないんだ

その反抗心は、2曲目の「グローイング・アップ」にも見られる。彼は「成長するっていうのは大変なこと」と歌い、すわれと言われたら立ちあがり、降りて来いと言われたらゲロをはくのである。

I hid in the clouded wrath of the crowd
But when they said "Sit down," I stood up
Ooo-ooh growin' up

群衆の混乱した怒りの中に身を隠した
彼らが「すわれ!」と言った時、ぼくは立ち上がった
成長するっていうのは大変なこと

このアルバムには、スプリングスティーンの後アルバムで登場するいくつかのテーマが萌芽の状態で存在している。おそらくこれらの歌を書いていた時には、彼自身そのことを意識してはいなかったに違いないが、われわれはそれを最終章『ゴースト・オブ・トム・ジョード』まで読むことによって、後知恵として知ることができる。

「アメリカの夢」「約束の地」ということばが初めて登場するのは、建国200年祭の前年、1975年にリリースされた3枚目のアルバム『明日なき暴走』にお

いてである。このアルバムの中の主人公たちは、建国200年祭のアメリカを陽のアメリカとすれば、陰のアメリカに住む、アメリカの夢に裏切られ続けながらも、アメリカの夢への信仰を捨てられずにいる若者たちである。このアルバムにおいて、スプリングスティーンははっきりと自分が歌うべき世界を意識的にとらえることができたように思われる。

『アズベリー・パークからの挨拶』の主人公たちは、アメリカの夢、それに裏切られてきた労働者階級の若者たちではあるが、自らそのことに気づいていない。それでも、「メアリー・クィーン・オブ・アーカンソー」の最後では、

But I know a place where we can go, Mary
Where I can get a good job and start all over again clean

でもメアリー、一緒に行くことができる場所を知っている
そこにはいい仕事があり、すべて最初からやりなおすことができる

と歌い、「ジ・エンジェル」では、

Off in the distance the marble dome reflects across the flatlands
With a naked feel off into parts unknown

遙かかなた、大理石のドームは大草原を映し
自由で未知な世界へと誘う

と歌い、『明日なき暴走』以後のアルバムに頻出する「約束の地」への脱出への試みを暗示している。

また「ロスト・イン・ザ・フラッド」のファースト・ヴァースの、

The ragamuffin gunner is returnin' home like a hungry runaway
He walks through town all alone

汚い格好の兵士が腹を空かせ逃亡者のように故郷に帰る
彼はたった一人で町を通り抜けて行く

で始まる冒頭の部分は、「ボーン・イン・ザ・USA」のベトナム帰還兵を彷彿させる。

同じ歌のセカンド・ヴァースでは、改造した車でレースをするセイント・ジミーと呼ばれる若者が登場する。ジェームス・ディーンを彷彿させるセイント・ジミーは、ディーンと同じく、ハイウェイを疾走中に激突死する。このセイント・ジミーのイメージは、スプリングスティーンのその後の多くのアルバムの中で、違った形で何度も登場することになる。

トピカルソングのライターとして世に出たボブ・ディランに素晴らしいラブソングがいくつもあるように、ブルーカラーの代弁者として知られるようになったスプリングスティーンにもいくつものすぐれたラブソングがある。ディランの場合と同じく、スプリングスティーンのラブソングには類型的な常套表現は見られない。

それはこのファースト・アルバムの歌に関しても言える。「フォー・ユー」は、

Princess cards she sends me with her regards
Barroom eyes shine vacancy
To see her you gotta look hard

彼女はことばを添えて王女様のようなカードを送ってくる
バールムのような目は「空き室あり」と語っている
でも彼女を見るためには、よく目を開けて見なければならない

と、通常のラブソングとはかなり趣を異とする表現から始まる。さらに、コーラスの部分では、

I came for you, for you, I came for you
But you did not need my urgency

ぼくはおまえを、おまえを求めた、おまえを求めた
でもおまえはぼくのせっぱつまった気持ちを必要としなかった

と女性に対する、まだ大人になる前の男の子の切ないあこがれが歌われている。
この歌の後半に出てくる柔らかいトロフィーのような「膨らみ始めたおまえの
胸」(a little girl with a trophy so soft)のイメージは鮮烈である。

「グローイング・アップ」では、

I stood stone-like at midnight suspended in my masquerade

俺は真夜中、一人の仮面舞踏会で、石のように突っ立っていた

と歌い、さらに、

I was open to pain and crossed by the rain
And I walked on a crooked crutch

痛みにさらされ、雨に降られ
曲がった松葉杖で歩いた

と歌う。大人になりつつある若者の孤独、劣等感、強がりがよく表わされている。
それはディランが「ジャスト・ライク・ア・ウーマン」で、

Nobody feels any pain
Tonight as I stand inside the rain

誰も痛みを感じない
今夜俺が雨の中に立っていても

と歌った世界に通じている。

スプリングスティーンファースト・アルバム『アズベリー・パークからの
挨拶』で描かれている世界は、大人になりつつある若者を取り巻く混沌とした
世界であり、彼の心を満たす混乱と不安である。しかし彼はその混沌とした世
界に押しつぶされてはいない。「成長するってことは大変なこと」ではあるが、
そして多くの困難に直面しながらも、彼はひとつの鍵を見つける。

And I swear I found the key to the universe
In the engine of an old parked car

断言してもいい、ぼくは見つけたんだ、宇宙への鍵を
古い駐車した車のエンジンの中に

この鍵がその後いくつかの扉を開いてくれる。このようにしてスプリングス
ティーンによる「連続小説」の第一章が始まるのである。

3

スプリングスティーンのセカンド・アルバム『青春の叫び』においては、
「約束の地」への脱出の試みは、『アズベリー・パークからの挨拶』と比べると
より自覚的になっている。サード・アルバム『明日なき暴走』の世界に一步近
づいている。サーカスのような喧騒の世界にうんざりし、そこから脱出したい
という願望がより明確に表現されている。

「フォース・オブ・ジュライ・アズベリー・パーク」では、

And me I just got tired of hangin' in them dusty arcades
Bangin' them pleasure machines
Chasin' the factory girls underneath the boardwalk
Where they promise to unsnap their jeans

もううんざり、埃っぽいアーケードをぶらついたり
ゲームマシンをたたいて生きること
もううんざり、ボードウォークの下でジーンズを脱いでくれる
工場の女の子を追いかけることに

と歌っている。さらに続いて次の4行が来る。

And you know that tilt-a whirl down on the south beach drag
I got on it last night and my shirt got caught
And that Joey kept me spinning'
I didn't think I'd ever get off

サウスビーチの斜めに揺れながら回転する乗り物
そいつに昨夜乗ったが、シャツが引っかかってしまった
ジョーイの奴は何もしないで見ていた
一生回りつづけるかと思ったよ

同じ場所に閉じ込められて回転しつづける人生のイメージは気分を滅入らせるに充分である。

スプリングスティーンの初期の作品の中ではよく知られている「ロザリータ」には、

I know a pretty little place in Southern
California down San Diego way
There's a little cafe where they play guitars all night and day
You can hear them in the back room strumin'

南カリフォルニア、サンディエゴの近くにいい店がある
24時間ギターの演奏をしている小さなカフェ
奥の部屋でギターをかき鳴らす音が聞こえる

というところがある。この歌の主人公は、ロザリータをオートバイのうしろに乗せ、大陸を横断してカリフォルニアを目指す。カリフォルニアは『怒りの葡萄』のトム・ジョード一家にとって、そして多くのアメリカ人にとって、約束の地、アメリカの夢が実現するはずの場所だったのである。

さらに、「ニューヨーク・シティ・セレナーデ」では、

So shake it away, so shake away your street life
Shake away your city life
And hook up to the train, hook up to the night train
Hook it up hook up to the, hook up to the train,

だから、こんな通りに立つ生活なんかやめて
都会の生活なんかとおさらばして
汽車に乗ろう、夜汽車に乗ろう
そう汽車に汽車に乗ろう

とある女性と一緒に都会の喧騒を離れて旅立つことを促すところがある。

スプリングスティーンとくればフリーウェイを疾走する車のイメージが強い

が、彼の初期の作品の中に汽車が登場するということは興味深い。なぜなら汽車は、アメリカのフォークソングの伝統の中では、精神的な救済のための乗り物として使われていることが多いからである。

「求道者としてのボブ・ディランと汽車のシンボリズム」⁵ で触れたように、ディランの作品には汽車が数多く登場する。宗教3部作のスタートとなった『スロー・トレイン・カミング』およびそのアルバム・タイトル曲からも、ディランにとって「汽車」が何を象徴しているかは明らかである。

ディランの『タイム・アウト・オブ・マインド』（1997年）の中の「トライング・トゥ・ゲット・トゥ・ヘブン」にも、

Some trains don't pull no gamblers
No midnight ramblers, like they did before

いくつかの汽車は、以前のように
賭博師や真夜中の放浪者は乗せてくれない

というところがあるが、これは、

This train don't carry no gamblers, this train
This train don't carry no gamblers, this train
This train don't carry no gamblers, hobo liars, midnight ramblers
This train, my Lord, this train

この汽車は賭博師は乗せてくれない
この汽車は賭博師は乗せてくれない
賭博師も、嘘つきの放浪者も、真夜中の放浪者も乗せてくれない
この汽車は、主よ、この汽車は

と歌われる古いフォークソングが本歌になっている。

ディランの作品が初期の頃から、極めて精神的であったのと比べると、スプリングスティーンが描いてきた世界は、精神的な救済というよりも、勤勉と努力と幸運によって誰でも到達できると教えられてきた「アメリカの夢」を求める世界、もう少し平たく言えば、一攫千金を夢見る世界であった。そして、その夢の実現のために必要な乗り物は、決まったレールの上しか走ることで

ない汽車ではなく、どこへでも自由に行くことのできる車だったのである。

14年振りに行われたEストリートバンドとのツアーのアンコール最後の曲は、新曲「ランド・オブ・ホープ・アンド・ドリームズ」であった。

この歌は、

Grab your ticket and your suitcase
Thunder's rolling down the tracks
Don't know where you're goin'
Sky is turnin' black
Well darlin' if you're weary
Lay your head upon my chest
We'll take what we can carry
And we'll leave behind the rest

さあ切符とスーツケースを持って
汽車が轟音を立てて近づいてくる
行き先は分からない
空は暗くなりつつある
疲れていたらぼくの胸に頭を休めるがいい
持てるものを持ち
持てないものは置いていこう

ということばで始まり、最後にはディランと同様に「ジス・トレイン」を下敷きにしたコーラスが繰り返される。

コーラスの部分の最初の4行は、

This train, carries saints and sinners
This train, carries losers and winners
This train, carries whores and gamblers
This train, carries midnight ramblers

この汽車、聖者と罪人を乗せてる
この汽車、敗者と勝者を乗せてる
この汽車、売春婦と賭博師を乗せてる
この汽車、真夜中の放浪者を乗せてる

なのだが、これは極めて象徴的である。本歌の「ジス・トレイン」に乗れるのは正しい者、信仰心の厚い者、神の掟を守る者だけであり、賭博師や売春婦は論外である。しかし、スプリングスティーンの汽車には誰でも乗ることができ

る。

スプリングスティーンは前述したように、今までの自らのアルバムを「いわば続いているひとつの小説」とであると、アズベリー・パーク・プレスの記事に語っているが、彼は『アズベリー・パークからの挨拶』から『ゴースト・オブ・トム・ジョード』に至るまでのアルバムを通して、さまざまな世界を見せてくれた。

彼の作品に触れる時、われわれは、彼があたかもカメラマンであるかのよう
に、彼が重要であると感じた対象に向けて淡々とカメラを回してきたという印象を得る。そこには善悪の判断は希薄である。いやむしろ、通常は悪だと思われる者たちや事柄に肩入れしているように思われさえする。

そして彼の全アルバムを通して分かることは、彼が重要であると感じてきた対象が、彼が住んでいた町から、アメリカ全土へ、そしてさらにアメリカから世界へと広がって行ったということである。

そして彼の歌は、外に向かって広がるのと同時に、より内省的に、より深く
なっていったのである。その最も典型的な例がアルバム『ゴースト・オブ・トム・ジョード』である。さらに、新曲「ランド・オブ・ホープ・アンド・ドリームズ」に至って、彼の作品の方向が、より精神的なものに向いてきているということが分かる。そしてその兆しはすでに『青春の叫び』の中に密かに用意されていたのである。

4

I was born right here on Randolph Street in Freehold
Here right behind that big red maple in Freehold
Well I went to school right here
Got laid and had my first beer in Freehold

ぼくが生まれたのはちょうどここ、フリーホルドのランドルフ通り
あの大きな紅い楓の木の後ろの家
そう、学校へ行ったのもここ

初体験も、最初のビールも、ここフリーホールド

と歌いだされる新曲「イン・フリーホールド」は、14年振りに行われたEストリートバンドとのツアーでのセットリストの中では特異な歌であった。彼は、この歌を歌う前に、久々のEストリートバンドとのコンサートに酔いしれ、激しいビートのロックンロールに合わせて踊り、喚声を上げる聴衆に向かって、「この歌はお願いだから、静かにしてことばを聞いて欲しい」と言った。⁶

この歌は、スプリングスティーンが、はっきりとそれと分かる形で、自らの生い立ちを歌っているということで特異であり、また、静かに語りかけるように歌うという点においても、彼の他の激しいロックンロールとは違っている。

彼がこの歌のことばを聴衆に聞いて欲しかったのは、おそらく、この歌によって、ニュージャージーの聴衆に対して、またこの歌の中で歌われている、フリーホルドの市長である幼なじみの「悪友のマイク」や、彼の銅像を建てようとしたが、予算不足で結局建てないという「良識ある」決定を下した市議員の友人たちに敬意を表するためだけではなく、30年の年月をかけて「ランド・オブ・フリーダム」の世界へたどりつくまでの道程を、聴衆によりよく理解してもらうためには、そのプロローグとして、この歌の内容を聞いてもらう必要があると考えたからではないだろうか。

第1章『アズベリー・パークからの挨拶』から始まった彼の「続いているひとつの小説」が、いつか最終章を迎える時、どのような世界をわれわれに見せてくれるのか楽しみである。

注

All lyrics by Bruce Springsteen and Bob Dylan are quoted only as necessary in the context of critical analysis.

1. 「アメリカにまつわる夢を歌いつづけた男」 レコードコレクターズ 1992年6月号 (ミュージック・マガジン社)

2. Kelly-Jane Cotter, the Asbury Park Press(<http://www.app.com/>)
3. Coyne, Kevin, "The Faulkner of Freehold," the Asbury Park Press
4. The Secret to Springsteen's Success, NBC July 25, 1999
(<http://www.msnbc.com/news/>)
5. 「求道者としてのボブ・ディランと汽車のシンボリズム」信州豊南女子短期大学紀要、第16号
6. Bruce Springsteen & E Street Band Concert, July 26, 1999 at Continental Airlines Arena, East Rutherford, New Jersey

Albums of Bruce Springsteen and Bob Dylan cited in this essay.

Bruce Springsteen

1. *Greetings from Asbury Park, NJ* (Sony SRCS-9466)
2. *The Wild, The Innocent and the E Street Shuffle* (Sony SRCS-6254)
3. *Born To Run* (Sony SRCS-8983)
4. *The Ghost of Tom Joad* (Sony SRCS-9474)
5. *Tracks* (Sony SRCS-8801~4)

Bob Dylan

1. *Slow Train coming* (CBSISONY 32OP375)
2. *Time Out Of Mind* (Sony SRCS-8456)